

研究課題	小規模特任校の児童・生徒の「心」を育て、「力」を付けるICT活用
副題	～互いに認め合い、自己存在感、自己肯定感を高める活動を通して～
キーワード	小規模校, PC 一人一台環境, 自己存在感, 自己肯定感, p4c,
学校/団体名	白石市立小原小中学校
所在地	〒989-0233 宮城県白石市小原字伊勢原道上1
ホームページ	http://obara-e.shiroishi-c.ed.jp/

1. 研究の背景

(1) 閉鎖的で固定化された人間関係

本校は、小学校 14, 中学校 16 名, 計 30 名の小中併設の小規模校である。児童・生徒は、長年積み重ね固定化された学級や学校内での人間関係を払拭できず、その枠や殻を破り、新たなことに挑戦しようという意欲に欠けてしまっている。そのため、自己肯定感が低く、本来の力を出し切れずにいる。また、対人関係を上手にこなすスキルに欠ける。

(2) 小規模特任校制度による転入児童・生徒の事態

本校は、市から小規模特任校の指定を受け、市内外からの児童・生徒を受け入れている。転入生の中には、本人や家庭に課題を抱え、不登校や別室登校をしている子供や、発達障害を抱えている子供もおり、個別の支援や指導が必要となっている。また、大きな集団の中で上手に自分を表現できず、小集団の中で、「楽しく生活したい。」「落ち着いて勉強したい。」という思いをもって転入している子供たちもいる。地元の子供たちとの人間関係の構築の難しさも抱えている。

(3) 学力の状況

人間関係の固定化が、話し合いや練り合いの活動を難しくしており、停滞した集団となってしまっている。そのため、物事を広く深く考える力や、相手意識を持って表現する力に欠けている。また、特認校制度により転入してくる子供たちの中には、これまでの大集団での生活の中で自信を失っている子供もおり、互いに認め合える集団の中で自己肯定感を高める必要がある。

2. 研究の目的

- 全校児童・生徒が自由に安心して意見を言うことができ、友達に共感して多様性を受け入れることができるようなネットワーク上のオープンな環境を構築し、全校児童・生徒、教員での意見交換と、認め合い励まし合いを行うことで、閉鎖的で固定化された人間関係を解きほぐすとともにソーシャルスキルを向上させ、個々の自己存在感を高め、集団の質を向上させる。
- タブレット PC の一人一台環境を整備し、自分の課題に向かって個別に学習できるとともに、授業の振り返りや学習の成果を確認し、自分の成長を実感できる授業を行うことで、児童・生徒の自己肯定感を高める。
- 互いに考えを伝え合い、多様な見方・考え方を覚えることのできる学習を通して、相手意識を持ったソーシャルスキルと、思考力・判断力・表現力を培う。

3. 児童・生徒につけたい力

(1) 考える力、聞く力、伝える力（表現する力）

多くの人々からの多様な意見や考えを理解すると共に、それをもとに自分なりに考え、考えたことを様々なテキストを活用して表現する力を育成していく。

(2) 人と関わる力（非認知能力）の育成

固定的な人間関係の中、自分の思いや考えを、しっかりと伝え合い、認め合うことのできる力を育成していく。

(3) 情報活用能力の育成

ソサエティ 5.0 時代にふさわしい情報活用能力を育成していく。

4. 研究の経過

月	研究内容	○助成金使途	■評価のための記録
年間	○年間カリキュラム改善作業 ○ICT環境構築・改善 ○Web ページにて研究概要、授業概要等発信		
4	○学力調査実施（全国：小6，中3，市：その他の学年） ○第1回児童・生徒の人間関係調査，学級満足度調査の実施		
5	○検証授業1 中学校 社会 (授業作り研修会—模擬授業—研究授業—ワークショップ型事後検討会) ※以下全ての検証授業において行った。		■調査用紙 ■授業記録，写真， ワークショップ記録 ※以下全ての検証授業について行った。
6	○タブレットPC等ICT機器購入・環境整備		○備品費（タブレットPC）
7	○ICT活用研修会（タブレットPC）		○旅費・研修会参加
8	○情報教育研究会参加 ○ICT授業作り研修会1 タブレットPC活用に関する研修（講師招聘の研修会）		○旅費・講師旅費
9	○デジタル型ドリル教材購入，活用スタート ○p4c 授業研修会（宮城教育大学及びハワイ大学より講師を招聘しての研修会）		○謝金・講師謝金 ○備品費（ライセンス購入）
10	○検証授業2・3・4 中学校 数学・英語 小学校 国語 ○ICT授業作り研修会2 プログラミング教育に関する研修（講師招聘の研修会）		
11	○検証授業5 中学校 理科		
12	○「p4c 国際フォーラム in 仙台」にて実践発表 ○第2回児童・生徒の人間関係調査，学級満足度調査の実施 ○学力調査実施		
1	○検証授業6 中学校 体育 ○先進校視察		○旅費・視察旅費
2	○検証授業7・8 小学校 算数，中学校 国語 ○p4c 授業研修会（宮城教育大学より講師を招聘しての研修会） ○検証授業9・10 小学校 生活・総合 中学校 技術科 (講師招聘によるプログラミング授業) ※白石市コンピュータ活用委員会 公開授業・研修会		○旅費・視察旅費 ○旅費・講師旅費 ○謝金・講師謝金
3	○研究のまとめ ○次年度の方向性検討，次年度計画作成		○会合費・講師昼食等 ■参観者からの感想

※本助成により購入のiPad、東北大学大学院堀田研究室から貸与のiPad、市費購入のノートPCにより、全校児童・生徒一人一台環境を実現

5. 代表的な実践

(1) 全校 P4C（小学校，中学校）

本校では、生徒全員で「全校 P4C」を行っている。主に朝の業前活動の10分で、子供たちから出た自由なテーマで語り合うものと、1時間かけてじっくりと語り合う道徳の授業によるものである。中学校では、ネットワーク上に、各々の考えや感想などを書き込むことのできる環境を



構築し、①問いだし、②テーマ決定、③初発の感想、④話し合いを終えての感想、⑤その後の意見等を入力し、全員の意見や感想の可視化を図っている。互いの意見が見えることで、思考の広がりや深まりが期待できる。

P4C(philosophy for children) : 探究の対話

子供（または教師）が「問い」を立て、「問い」や考えを共有しながら、テーマについて理解を深めるための対話を行うもの。皆で円座になって対話をし、内容を掘り下げながら考えを深めていく。その学習スタイルの基盤は、「何を話しても否定されない。周りの人がしっかり話を聞いてくれる。」という知的な安心感（セーフティ）を構築することにある。

※指導・助言：宮城教育大学上廣倫理教育アカデミー

【実践授業】道徳（全校道徳）中学1年～3年全校生徒16名

時間	学 習 内 容	
事前	問いだし	<ul style="list-style-type: none"> ○授業のねらいに直結する「テーマ」を教師が提示する。 ○テーマについての「問い」を業前活動等に個々に考えて入力する。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> ※教師が提示したテーマ：「広い心」 生徒がたてた「問い」の例： ・気持ちを表に出す人ってどう思う？・優しい心と広い心はどこが違うのか？・めっちゃ疲れて電車に乗っているとき席を譲れる？ </div> <ul style="list-style-type: none"> ○それぞれが入力した「問い」をあらかじめ確認しておく。
	テーマ決定	<ul style="list-style-type: none"> ○それぞれの「問い」を見て、「いいね」ボタンで投票する。 ○上位3つの「問い」から決戦投票し、1つの「問い」に絞る。
	初発の感想入力	<ul style="list-style-type: none"> ○「問い」つくった生徒は、「なぜその問いにしたのか」と「自分の考え」を入力する。 ○その他の生徒は、「問い」に対する自分の考えを入力する。
本時	P4Cによる話し合い	<ul style="list-style-type: none"> ○「問い」についての自分の考えを話すことからスタートし、テーマについて語り合う。 ○コミュニティボールをもっている生徒だけが話すことができるとともに、それぞれの発言を否定しないというルールを確認することで、生徒が安心して、自由に話すことができるようにする。 ○教師も参加し、生徒と同じ目線で話し合う。大人の考え、親としての考え等も出されるため、生徒にとっては、世代を超えた考えを見聞きすることができる。 ○互いの「問い」を確認しているため、話し合いの中で出された「問い」につなげていくことができるため、話し合いに広がりや深まりを持たせることができる。 ○生徒の自由な発言により、テーマについての話が次々と拡散していくが、無理に収束しようとせず、テーマについて考えを広げ深めることを重視する。

	感想記入と発表	○話し合いを通して考えたことや感想を入力し合い、互いに見合う。
授 業 後	意見再入力	○授業後、授業の経過をいつでも見ることができることから、友達の意見に対して更に考えたことや疑問に思ったことなどを書き加えることで、テーマについての考えをさらに深める。

(2) 日常的な活用

① 今朝のひとこと (中学校)

○毎日、教師からの問いかけに、自分なりの感想等を答える活動を行った。今朝の気分と、問いに関する答えを入力することで、自分の気分や考えを素直に表現する力を養うことと、情報活用の実践力をつけることをねらいとした。



○短い活動のため、長い文書にはならないが、

自己中心的ではなく相手意識をもって発言するよう指導した。

○コロナウィルス拡大防止のための臨時休業中も、この実践を続けたことで、会うことはできないが、ネットワーク上で先生や友達とのつながりをもつことができた。

※教師からの問いかけ例 ・最近あった、うれしかったこと ・終末何をしていた? ・オリジナルの寒さ対策 ・雨の日の楽しみ方

② デジタルドリル教材の活用 (小学校・中学校)

○業前、休み時間、授業中、放課後、家庭等、いつでも問題を解くことのできる環境をつくることで、自学・自習する力をつけるとともに、基礎的な学力の向上を目指した。

○不登校だった子供たちは、休んでいた時の学習が抜け落ちてしまっており、そのことが原因で学習意欲を失ってしまうことがある。(特に算数・数学、英語等) そのため、自分の力で学ぶ力を付けたいと考えた。

○教師は、常に子供たちの学習状況を確認することができるため、個に応じた指導を継続することができる。



○コロナウィルス拡大防止のための臨時休業中も、この実践を続けた。毎日数時間アクセスして問題を解く子供たちも出てきた。

③ プログラミング (小学校)

○業前、休み時間、放課後等にプログラミングのゲーム的な問題を自分のペースで行うことができるようにした。

○授業の中で、プログラミングの基礎的なことやアプリケーションの使い方等の基本的な事項を指導した後、自由に活用することができるようにした。

○高学年には、冬休み等の長期休業中にもタブレットを貸出し、自分なりのプログラムを自由に組ませる活動を行った。

○ゲーム的な感覚で操作することができるとともに何度も試行錯誤しながらやり直すことができるため、楽しみながら行っていた。

(3) 各教科での活用事例

①国語 物語文 (小学校5年生)

- 主人公の心情を読み取り、ノートにまとめ、そのノートを撮影し、互いの考えを見合い、比較し、交流する活動を行った。
- 個々の考えを説明し合い比較し合うことで思考力と表現力の向上を図った。



②社会 歴史 (中学校2年生)

- これまで学習してきた江戸時代のまとめを、分野別にまとめる授業。
- 数枚の画面にまとめてプレゼンする活動を通して、表現力の向上を図った。
- 資料等の写真、図、表等、様々なテキストを活用し、まとめる力の育成を図った。

③総合 ざいもく岩 (小学校5・6年, 中1年合同の授業)

- 小原地域の環境や伝統文化を学ぶことを通して、環境の大切さを感じると共に、郷土を愛し、郷土を大切にしようとする心情を養う授業。
- 小学校5・6年生と中学校1年生の3学年合同の学習。小中学校の児童生徒と一緒に学ぶことで、より多くの視点で物事を見ることができるとともに、小学生は中学生の学び方やまとめ方、表現の仕方などを学ぶことができる。
- 3年間の学習を通して、地域の人材や関係者等の多世代の方々に関わり合うことができるため、コミュにケースション能力の向上を図った。

④P4C キャンプ (中学生)

- 宮城教育大学上廣倫理教育アカデミー主催の、市内中学校代表生徒が自然の家で野外活動やP4Cを行うキャンプに、本校は生徒全員で参加した。
- 同世代の生徒と共同生活することで、集団の中で人と関わる力の育成を図った。
- このキャンプをきっかけに、学校の枠を超えての交流が行われている。

6. 研究の成果

(1) 「考える力、聞く力、伝える力(表現する力)の育成」について

- 課題やテーマについて主体的に考え、考えたことを自分の言葉で伝えようとする意欲とスキルがついてきた。また、学習後も考え続けようとする力がついてきた。
- 図、表、絵、文章等の様々なテキストを活用して、相手に分かりやすく伝えようとする意識とスキルがついてきた。

(2) 人と関わる力(非認知能力)の育成について

- 自己中心的な発言ではなく、相手意識を持った発言ができるようになった。
- 他人の発言を聞き、その考えを認めようとするとともに、その意見に対してさらに自分なりの考えを加えて話そうという意識がついてきた。
- 互いの良さを認め合うことができるようになり、自己存在感が高まり、学校全体の人間関係が良好になってきた。また、不登校気味の子どもの居場所にもなってきた。

○他校との交流や、多くの学校の子どもたちが集まる活動等で、自分を表現しようとする意識と、スキルがついてきた。

(3) 情報活用能力の育成について

○ICT 機器を主体的に活用し、様々なテキストを活用しながら表現する力がついてきた。

○常時 ICT 機器を携帯し、疑問に思ったこと、分からないこと等を調べようとする姿が見られるようになってきた。



6. 今後の課題・展望

(1) 「考える力、聞く力、伝える力（表現する力）の育成」について

○多様な意見を聞くことで、思考に広がりを見ることができたが、その意見の意図をつかみ、さらに自分の意見を再構築しようとする意識をもたせていきたい。

○互いの意見を交換し合ったり、交流し合ったりすることはできるようになってきたが、互いの意見を比較・検討し、さらに深める活動を行っていきたい。

(2) 人と関わる力（非認知能力）の育成について

○次年度、遠隔教育について実践していきたい。本校だけでなく、他校との交流を継続的にすることで、さらに人と関わる力を高めていきたい。

(3) 情報活用能力の育成について

○自分の考えを上手く伝えるスキルと活用したいときに活用する力をつけていきたい。

7. おわりに

本校には、固定的な人間関係の中で、本音を言えない子供たちが存在している。また、中・大規模校には、大きな集団の中で自分を上手く表現できずにいる子供たちが少なからずいる。このような子供たちに、ICT を活用してこれからの社会をたくましく生きる力をつけていきたいと考え本研究を進めてきた。多方面からの支援により一人一台環境を実現することができたことから、日々の活用を通して、学級や学校の中で安心して自分の意見が言え、互いに認め合える集団を作ることにより、学級・学校の中で自己存在感をもつことができると考える。また、きめ細やかな学習面での支援を行うことで、自己肯定感が培われ、学習意欲を向上させることができたと考える。子供一人ひとりの「心」を育てることが、「力」をつけることにつながることを実感した実践であった。次年度本校は、小中一貫校「小原学園」として開校し、学区外からも自由に転入学できる学校となる。他校との交流学习、遠隔協働授業等を通して、外に目を向け、相手意識をさらに高める手立てを取り、さらに子供たちの力を高めていきたい。

8. 参考文献

- 野澤令照 (2017) 『子どもたちの未来を拓く探究の対話「p4c」』 東京書籍
- 堀田龍也 他(2019)『子どもも教師も元気になる「これからの教室」のつくりかた』学芸みらい社
- つくば市教育局総合教育研究所(2018)『これならできる小学校教科でのプログラミング教育』東京書籍
- 黒上晴夫・堀田龍也(2017)『プログラミング教育導入の前に知っておきたい思考のアイディア』小学館